

1 キャリア教育って何だろう

(1) キャリア教育の定義って…？

キャリア教育は、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」(※1)と定義されます。

ここで言うキャリアとは、「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」(※2)を指しています(下図参照)。

すなわち、一人一人の発達というものを、自己と働くことを結びつけながら歩んでいく人生行路であるとみなし、それを支援するのがキャリア教育である、と位置付けることができます。



引用

- ※1 文部科学省(2010). 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会 第二次審議経過報告)(平成22年5月17日)
- ※2 文部科学省(2004). キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～(平成16年1月28日)

キャリアとは？



出典：小学校キャリア教育の手引き(文部科学省、2010)

(2) キャリア教育は何を目指すの…？

キャリア教育が目標とするところは、一人一人のキャリア発達のために、社会的・職業的自立に向けて、必要な基盤となる能力や態度を育てることにあります。すなわち、個々の子どもたちが、社会の中で生きていくために不可欠な能力を育むことが、キャリア教育の目標となります。このことから、キャリア教育では、児童生徒の個性や発達段階を踏まえて目標設定することが必要です。

ここでは、児童生徒の発達段階を踏まえつつ、学校でのキャリア教育の目標を設定するための手掛かりとして、文部科学省が示す、小学校・中学校・高等学校のキャリア教育の目標例を紹介します。

小学校（進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期）

- 自己及び他者への積極的関心の形成・発展
- 身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上
- 夢や希望、憧れる自己のイメージの獲得
- 勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の育成

中学校（現実的探索と暫定的選択の時期）

- 肯定的自己理解と自己有用感の獲得
- 興味・関心等に基づく勤労観・職業観の形成
- 進路計画の立案と暫定的選択
- 生き方や進路に関する現実的探索

高等学校（現実的探索・試行と社会的移行準備の時期）

- 自己理解の深化と自己受容
- 選択基準としての勤労観、職業観の確立
- 将来設計の立案と社会的移行の準備
- 進路の現実吟味と試行的参加

なお、我が国において、個々のキャリアは、生涯にわたって形成されていくことが期待されています。つまり、少なくとも学校でのキャリア教育は、一人一人が各学校へ入学してからはもちろんのこと、彼らの卒業後も視野に入れておくことが要求されるのです。そのためにも、効果的なキャリア教育を目指すのであれば、学校種間での円滑な連携・接続を図ることが重要です。

引用

文部科学省（2010）． 小学校キャリア教育の手引き（平成22年1月）

(3) キャリア教育には、どんな意義があるの…？

我が国において、キャリア教育を改善・充実させることの意義は、実に大きいと言えます。文部科学省は、学校でキャリア教育を進めていくことの意義について、以下の4点でまとめています。

① キャリア教育は教育改革の理念と方向性を示す

一人一人のキャリア発達や個としての自立を促す視点から、従来の教育の在り方や教育課程編成の在り方を幅広く見直し、改革していくための理念と方向性を示す。

② キャリア教育は子どもたちの「発達」を促す

キャリア教育に取り組むことによって、学校教育が目指す、子どもたちの全人的成長・発達を促す。

③ キャリア教育は学習意欲を高め、学習習慣の確立を促す

キャリア教育を通して、子どもたちは自らの将来について夢やあこがれをもったり、学ぶ意義を理解したりする。

④ キャリア教育は教育課題の解決に資する

キャリア教育は、学校教育がかかえている課題、人間関係づくり、不登校、学力向上、地域連携、体験活動など様々な課題の解決に活路を開く。

キャリア教育は、以前から学校教育で重視されてきた「生きる力」を育むための取組の一つであるとも位置付けることができます。もともと、我が国では、産業構造の変化、学校制度の在り方、青少年の就労にまつわる様々な課題が、特に近年において見逃せなくなってきました。こうしたことを踏まえるならば、キャリア教育という体系のもとで、「生きる力」の育成を推し進めるという点に、今日の学校教育におけるキャリア教育の積極的意義があるとまとめることができるでしょう。

引用

文部科学省（2010）. 小学校キャリア教育の手引き（平成22年1月）

2 キャリア教育をこう進めよう

(1) 四つの身に付けさせたい能力があります

文部科学省は、キャリア教育として育む必要のある主要な能力を、4つの能力として整理しています。それは、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」です。以下、これらの能力について定義した上で、それを育むための手だてについて具体的に紹介していきます。

① 人間関係形成・社会形成能力

「多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力」

このような力は、あいさつのように、基本的生活習慣として他者との間で日常的に交わされるやり取りから、対人場面での問題解決といった、相手の立場を踏まえながらも自己主張をするような機会まで、様々な対人経験を通じて形成されます。学校においては、日々の教師との交流や、他の児童生徒との集団活動によって、こうした能力を育むことにつながるでしょう。

② 自己理解・自己管理能力

「自分が『できること』『意義を感じること』『したいこと』について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自分の思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力」

学校においては、児童生徒に対して、学習活動をはじめとした諸活動を、できるだけ豊富に経験させることが、自らの能力に対する認識や、活動に対する興味・関心を高め、その結果として深い自己理解をもたらすことへとつながります。また、児童生徒に、自分の将来の夢を確認させたり、自分の性格を分析させたりするなど、自らのことについて直接見つめさせる機会を設けることができるでしょう。そしてこうした自己理解が、より客観的なものになるようにするためには、各活動の場で、児童生徒が相互に交流できるように仕掛けていくとよいでしょう。加えて、児童生徒には、学校内外での生活について、できるだけ学習計画などの様々な計画を立てさせ、それを実践させるように指導することは、自己管理能力の育成につながっていきます。

③ 課題対応能力

「仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力」

こうした力は、基本的な生活習慣の形成、例えば、机の整理、身のまわりの整頓、授業の準備、係活動や当番活動などを通じて、その基盤的能力が育まれます。さらに、学校の活動においては、各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動において、児童生徒に種々の問題解決に取り組ませることによって、課題対応能力を高めることとなります。

④ キャリアプランニング能力

「『働くこと』を担う意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて『働くこと』を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリア形成していく力」

学校では、児童生徒が、様々な社会人と交流し、自ら職場体験をする取組を企画することにより、キャリアプランニング能力の基盤を育むことが期待できます。また、児童生徒に、自分の将来設計を立てさせるような活動も有意義でしょう。なお、「ものづくり」が盛んな愛知県においては、児童生徒のキャリアプランニング能力を豊かにするためのリソースに恵まれています。上述の取組を実現するためにも、各学校においては、日ごろより、地元産業界や各種機関との連携を意識しておくことが重要です。

以上の能力は、お互いに独立しているわけではなく、関連し合うものです。また、学校教育の場において、実際にこうした能力を育む場合は、学習指導要領を踏まえつつ、児童生徒の発達段階や、学校並びに地域のニーズに応じて検討することが求められます。

引用

文部科学省（2010）. 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について
(中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会 第二次審議経過報告) (平成22年5月17日)

キャリア教育で身に付けさせたい能力の具体例(学年および4能力別)

	小学校			中学校			
	1, 2年生	3, 4年生	5, 6年生	1年生	2年生	3年生	
人間関係形成・社会形成能力	気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心がけて明るく接する。	礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。(No.6)	時と場合をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。	礼儀の意義を理解し、時と場合に応じた適切な言動をとる。			
	身近な人に温かく接する。	相手のことを思いやり、進んで親切にする。(No.6)	だれに対しても思いやりの心をもち、相手の立場に立って親切にする。	他の人々に対し思いやりの心をもつ。	他者の話を傾聴し、質問する。(No.20)		
	友だちと仲良くする。	友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。(No.6)	互いに傾聴し、学びあって友情を深め男女仲よく協力し助け合う。	心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。			
	友だちと協力して仕事をする。(No.3)	生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。	広い心で自分と異なる意見や立場を大切にす。	異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。			
	相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて話す。	相手に目的に応じて、理由や事例などを挙げながら筋道を立て、丁寧な言葉を用いるなど適切な言葉遣いで話す。(No.6)	人の役に立つ積極的な行動を心掛ける。(No.9)	個性や立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方があることを理解して、寛容の心をもち謙虚に他に学ぶ。(No.15)	集団の中で周囲と協調しながらリーダーシップをとる。	状況に合わせて効果的なプレゼンテーションをとる。(No.26)	
	姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して、はっきりした発音で話す。	相手を見たり、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意したりして話す。	目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら、場に応じた適切な言葉遣いで話す。	他者の発言や反応を踏まえながら話す。(No.15)	働くことに関する自分の体験を、他者に分かりやすく説明する。(No.20)	他者の意見を尊重しつつ自分の意見について適切に表現する。(No.26)	
	互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合う。	話の中心に気を付けて聞き、質問したり感想を述べたりする。	互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合う。	話し速度や音量、言葉の調子や間の取り方、相手に分かりやすい語句の選択、相手や場に応じた言葉遣いなどについての知識を生かして話す。	他者との意見交換を適切に行う。(No.20)	場の状況や相手の様子に応じて話すとともに、敬語を適切に使う。	
		司会や提案などの役割を果たしながら、進行に沿って話し合う。	外国語活動を通じて、コミュニケーションを図ることの楽しさや大切さ、さらには多様なもの見方や考え方があることに関心をもつ。	話し合いの話題や方向を捉えて的確に話す。	話の中心的部分と付加的な部分などに注意し、論理的な構成や展開を考えて話す。	話し合いが効果的に展開するように進行の仕方を工夫し、課題の解決に向けて互いの考えを生かす。	
		健康や安全に気を付ける。	自分のできることは自分でする。	生活習慣の大切さを知る。	望ましい生活習慣を身に付ける。		
		ものを大切にする。	よく考えて、節度ある行動をとる。	自分の生活を見直す。(No.11)	心身の健康の増進を図る。		
自己理解・自己管理能力	規則正しい生活をする。	自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。	節度を守り節制に心掛ける。	節度を守り節制に心掛け調和のある生活をする。			
	自分のするべき勉強や仕事を前向きな姿勢で行う。(No.1)	自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす。(No.5)	より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。	より高い目標を目指し、夢と希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ。			
	日常生活や学習に邁進して取り組もうとする態度を身に付ける。	約束や社会のきまりを守る。	自律的で責任のある行動をする。	自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任をもつ。			
	自分の成長を振り返り、自分ができるようになったことを知る。	日常生活や学習に意欲的に取り組もうとする態度を身に付ける。	自分の特徴を知って、悪いところを改めてよい所を積極的に伸ばす。	自己を見つめ、自己の向上を図る。(No.13)	自分に合った学習方法を知り、学習を進める。(No.17)		
			法やきまりを守る。	個性を伸ばして充実した生き方を追求する。	自分の個性を生かして活動することができる。(No.19)	自分に合った学習方法を知り、学習を進める。	
			他者との関わりを通じて自分の考えを深める。(No.11)	法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。			
			日常生活や学習に自主的に取り組もうとする態度を高める。			前向きに考える力、忍耐力、ストレスマネジメントの意義を理解する。(No.23)	
	課題対応能力	係活動や当番活動がもつ役割に気付く。(No.2)	計画的に情報収集することの大切さを知る。(No.7)	自分の日常生活における問題点を発見する。(No.12)	資料等のさまざまな情報から課題を発見する。(No.14)	問題の解決に必要なとされる情報を多様な方法で収集する。(No.18)	問題の解決につながる自分の考えを適切に表現する。(No.22)
		日頃行っている係活動や当番活動のより良い取り組み方について考える。(No.2)	情報収集の方法について理解する。(No.7)	自分の日常生活における問題を見直し改善する。(No.12)	問題の解決に向けて見直しをもって計画する。(No.14)	問題の解決に必要なとされる情報を適切に整理する。(No.18)	他者の意見とを比較しながら自分の意見を評価し改善する。(No.25)
		身近なことや経験したことなどから課題を決め、必要な事柄を思い出す。	関心のあることなどから課題を決め、必要な事柄について調べ、要点をメモする。	考えたことや伝えたいことなどから課題を決め、収集した知識や情報を関係付ける。	人との交流を通じて情報を集める。	異なる立場や考えを想定して自分の考えをまとめる。	自分の経験や知識を整理して考えをまとめる。
			話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめる。	必要に応じて他者に質問しながら聞き取り、自分の考えとの共通点や相違点を整理する。	目的や状況に応じて、資料や機器などを効果的に活用して話す。	語句や文を効果的に使い、資料などを活用して説得力のある話を述べる。	
					目的に沿って話し合い、互いの発言を検討して自分の考えを広げる。	聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分のもの見方や考え方を深めたり、表現に生かしたりする。	
キャリアプランニング能力	働くことへの関心を高める。	働くことの大切さを知る。	働くことの意義を理解する。(No.10)	勤労の尊さや意義を理解する。			
	みんなのために働く。	進んでみんなのために働く。	社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことを理解する。	奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める。			
	働くことの喜びや満足感を感じる。(No.4)	働くことにおいて、さまざまな工夫や努力が必要であることを知る。(No.8)	さまざまな仕事に、それぞれのやりがいがあることを理解する。(No.10)	自分のよさが生かせる職種について考える。	自分の個性を見つめながら将来の生き方および職業について考える。(No.21)	働くことが社会を支えるという意義があることについて理解する。(No.24)	
		各教科の学習が、自分の将来の生き方と関連していることに気付く。	各教科の学習が、自分の将来の生活や職業と関連していることへの理解を深める。	職業に対する多様なもの見方や考え方について理解する。(No.16)	自分の将来をイメージしながら進路について考える。(No.21)	自分の個性を深く理解しながら将来の生き方および職業について考える。(No.24)	
	地域の産業・職業の様子やその変化が分かる。(No.8)	地域の伝統・文化にはどのようなものがあるか知る。(No.10)			さまざまな資料から自分の進路に関連した情報を選択する。(No.21)	希望する職業に応じて、自分の進路の見直しを立てる。(No.27)	

*1 「小学校学習指導要領」(文部科学省、平成20年3月告示)、「中学校学習指導要領」(文部科学省、平成20年3月告示)、「キャリア教育のススメ」(文部科学省国立政策研究所生徒指導センター、平成22年5月発行)を参考に、愛知県義務教育問題研究協議会専門部会で作成したものである。

*2 表の網掛け部分は、本キャリア教育推進の手引「実践編」に掲載されている授業(No.)でめざそうとする能力である。

(※ 上の表の詳細については、TOPページからエクセルファイルを開くことができます)

(2) 計画を立てよう

キャリア教育の目標や育てたい力を考えると、これまで各学校で行ってきたキャリア教育以外の実践と重なる部分が多いことに気付かれるでしょう。では、実践するに当たって、どのように計画を立てていけばよいのか3つの段階を踏まえながら述べてみます。

① 現在の教育活動を見直そう

キャリア教育の実践に当たっては、いきなり新しい行事や取り組みを考えて実践していくよりも、既に各学校が課題として取り組んでいる活動を見直すことから取りかかることが重要です。なぜなら、実践準備にかかる時間の効率化だけでなく、今既に行っている教育がいかに子



どもたちのキャリアにかかわる問題であるかを意識することができるからです。では具体的にどのように見直しを行えばよいのでしょうか。

まず、キャリア教育の目標に挙げられていたように「社会の中で子どもたちが生きていくために必要な能力を育てる」ためにどのような能力を身に付けておく必要があるのかを教員間で共通理解することが必要です。恐らく多くの学校では、既に子どもたちに身に付けさせたい能力を教育目標として掲げて実践を行っていると思われるので、その目標を生かしてより具体化することも可能です。その上で、それらの能力を身に付けさせるための教育活動として現在行っていることは何かについて整理することで、それぞれの活動が「キャリア」という観点から関係付けられていくのです。

ここで注意すべきこととしては、「キャリア教育」であるからといって、直接的に「職業」にかかわる取組だけを入れようとしないことです。「1 キャリア教育って何だろう」でも述べられているように、「キャリア教育」が目指すのは子どもたちの「社会的・職業的自立」です。特に小学校段階では具体的な職業の理解を深めることよりも、その後の子どもたちのキャリア発達の基礎となる能力を育てていくことが重要になります。また、中学校段階では小学校段階で身に付けた能力を踏まえ、それをどう発展させていくかがポイントになるのです。

そのためにも、現在の教育活動を見直し、各学校が把握している子どもたちの実態や実情に合わせて身に付けさせたい能力を設定し、それらを身に付けさせる

ためには何を行えばよいか考えていくことが計画の第一歩となるでしょう。

② 教育活動相互のつながりを考えよう

①で挙げた教育活動の見直しを行うことができれば、次はそれらの実践を学年別に系統立てていきます。それぞれの学年で行われている実践が、各能力においてどのようにつながっているのか把握することがこの段階の課題です。その際、つながりを表で示すことができればより分かりやすくなります。(下記表参照)

学校で実践されている教育活動を「キャリア教育」の観点から整理した表(例)

	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
1年生		道徳「くつあらい」 * 前向きに考える力	学級活動「当番の仕事を考えよう」 * 課題発見	
2年生	生活科「町たんけんに出かけよう」 * 他者に働きかける力			道徳「たんじょう日のプレゼント」 * 働くことの意義や役割の理解
3年生	道徳「ことばのまほう」 * コミュニケーション・スキル	学級活動「友だちのよさ・自分のよさをみつけよう」 * 他者と自己の違いの理解		
4年生			総合的な学習の時間「環境問題を調べる計画を立てよう」 * 情報収集	社会科「消防署の仕事調べよう」 * 働くことの意義や役割の理解
5年生	道徳「歩道にとめられた自転車」 * 他者に働きかける力			総合的な学習の時間「伝統の筆づくりを体験しよう」 * 働くことの意義や役割の理解
6年生		学級活動「小学生に携帯電話は必要か」 * 他者と自己の違いの理解・主体的行動	体育科(保健)「健康な食生活を考えよう」 * 課題発見, 評価・改善	

つまり、2年生の生活科の実践で身に付けさせた能力が4年生の社会科でどのように生かされるのか、また高学年になった際、どのような能力として発展していくことが期待されるのかといったことを考えていくのです。

こうしたつながりを教師が意識しておくことで、子どもたち自身も折に触れ、自分が身に付けた能力のつながりを意識することができるようになり、また身に付けた能力を応用して生かす経験を積むことができるようになると期待されます。また、このようなつながりを考えることは、各教科間の実践がどのようにかかわっているのかを整理できるだけでなく、小学校—中学校など、前後の学校間(異校種間)の連携を考えていくときにも有効になります。

③ 過不足を調整しよう

①②を踏まえ、最後に身に付けさせたい能力に照らし合わせて、学年・時期・内容に過不足がないか調整を行います。

子どもたちや地域・学校の実態に応じて、新たに導入できそうな取組があればそれを位置付け、また重複しそうな内容があれば、必要に応じて整理していきます。

(3) 組織をつくろう

① 校内組織をつくろう

キャリア教育は、学級担任が中心的役割を担うことにより、実践しやすくなることでしょう。なぜならば、キャリア教育は各教科や道徳、総合的な学習の時間や特別活動など様々な教育活動にかかわっていることに加え、学級担任は児童生徒のことをよく理解しているからです。そして最終的には校長の方針に基づき、キャリア教育推進プロジェクトを立ち上げ、全教員協力の下に実践が進められるよう体制を整えることが理想的です。しかし、すぐにその体制を整えることが難しい場合もあるでしょう。では、その場合、最低限どのような組織づくりを心掛けたらよいのでしょうか。

まず、各学年でキャリア教育に対する認識を共有する場をもつことから始めるとよいでしょう。特に小学校の場合は、多くが学級担任制であることから、当該学年のキャリア教育としてどのような能力を身に付けさせることを目指すのかを共有し、実践したことを伝え合うことで、各教科や実践のかかわり合いが生まれてくると考えられます。中学校の場合は、恐らく教科担任制であるため、学年内での相談の場は、必ずしもキャリア教育のためのものではないにしても、何かしら存在するでしょう。そうした場で「キャリア教育」を話題にすることから始めると実践を進めていきやすいと言えます。

このように、学年内でキャリア教育について認識を共有する場を設けることができたなら、次は各学年間でそれぞれの取り組みを共有できる組織作りが必要になります。「(2) 計画を立てよう」でも述べましたが、キャリア教育は子どもたちのキャリア発達を促すことを目標に計画を立てることが大切です。そのためには前後の学年でどのような実践が行われ、それによって子どもたちがどのような能力を身に付けたのかを把握し、それらを生かしたり、更に先を見据えて実践したりしていくことが求められるのです。

特に学年間での交流を組織的に進めていくためには、既に教育活動としてもよく導入されている縦割りによる行事や活動を「キャリア教育」に積極的に活用することも効果的でしょう。

そして、こうしたキャリア教育の実践に向けた組織づくりを行っていくためには、全体を見渡しながらかーディネートする立場の人をおくと、よりスムーズに実践が進んでいくでしょう。

② 学校間(異校種間)の連携を図ろう

①で挙げたような校内組織の構成と同時に、キャリア教育を実践する上で重要なのが前後の学校間での連携です。

キャリア教育で育成すべき能力は、各学校内で完結するものではなく、生涯にわたって発達していくものです。そうした視点から考えても、前段階の学校でど



のような教育が行われ、その結果どのような能力が身に付いているのか、また、現在の教育によって身に付けた能力を、次の学校段階でどのように発展させていくのかというつながりをイメージできる状態にしておく必要があるのです。

例えば、小学校において「モノづくり体験」を行ったとしましょう。そして、中学校においても「職場体験」に行かせることを計画した場合、仮に小学校の体験と同じ職種であっても、子どもたちが学ぶべき内容は異なるはずなのです。体験を通して子どもたちに何を学ばせるのかを考える上でも、前後の学校で何を行い、そこではどのような能力を身に付けさせようとしているのか（また身に付けさせたのか）を把握することは不可欠です。少なくとも、こうした情報交換が学校間でできるような組織づくりは必要になってきます。

従来は中学校を中心に「進路指導部会」などの組織で中学校—高等学校間の連携は取られてきた地域もあるでしょう。そこに小学校も加わり、「進路指導・キャリア教育」について話し合う形から始めていくことも一案です。

③ 保護者、地域の人々との連携を図ろう

そして、組織づくりのもう一つのポイントに、保護者や地域の人々との連携をどう図るかという問題があります。保護者や地域の人々は学校がキャリア教育を進めていく上で、とても重要かつ強力な支援者です。

学校での取組を、学級通信などを通じて保護者に伝えながら、家庭でもキャリアにかかわる話を親子でしていただき、またその内容を学校での実践に生かしていくなど、学校と家庭が共にかかわり合いをもてるような組織づくり（働き掛け）も必要でしょう。

さらに、地域の人々とのかかわりをつくるには、職場体験学習の受入先として



だけでなく、日頃から学校に来ていただく機会を設けるなど交流をもつことが大切です。

社会科の学習の一環として、地域の様子を調べたり、放課後探検クラブなどを組織して、子どもたちと地域にどのような大人が働いているのかを調べたりすることも一つの方法です。

地域の大人の姿は、子どもたちにとって、親とともにとても身近

な社会人モデルです。そうした働く大人の姿を見せることが、まさにキャリア教育につながります。そうしたことを意識してキャリア教育を行っていくことが望まれます。

(4) 評価をしよう

キャリア教育を実践した後は、その取組によって目標としていた能力が身に付いたのかどうかを確かめることが必要になります。また評価を適切に行うことで、次の実践の改善を行うことも可能になります。では、評価を行う際の留意点を、以下の2つの点を中心にみていきましょう。

① 評価の基盤となる指標をつくろう

これまでも様々な教育実践において、子どもたちの実態を把握し、理想とする姿との差を明らかにし、その差を埋めるために教育活動を計画・実践するという形がとられてきたと思います。しかし、その評価に当たっては、「教育振興基本計画」(文部科学省、2008)の中でも指摘されているように、ともすると「その差を埋めるため活動を行ったかどうか」(アウトプット評価)で評価する傾向があり、評価結果を実践の改善に生かすというサイクルがうまく機能してこなかった面があります。キャリア教育についてもこれらの教育活動と基本的には同じ反省に立ちながら、「実践を通して子どもたちにどのような力が身に付いたのか」を評価し、それを実践の改善に生かしていくような評価(アウトカム評価)を心掛けていく必要があります。

繰り返しになりますが、そのような評価を行おうとすると、結局は「キャリア教育で何を身に付けさせたいか」ということを、より具体的な能力レベルで考えておかなければなりません。キャリア教育は生涯にわたるキャリア発達を促進することが目標であるからといって、抽象的な子ども像を目標とするだけでは具体的な評価ができないのです。

目の前の子どもたちが将来社会に出て自立して生きていくためには、現時点で何ができるようになればよいのかを具体的に考え、その目標に対して現状では何が不足しているのかを把握し、実践を計画・実行するというPDCA(Plan-Do-Check-Action)サイクルを通してこそ、改善に生かす評価ができるのです。これからの実践では、このような評価ができるような体制をとりながら、教員だれもが同じレベルで実践を評価できるようなチェックシート(次ページの表参照)を作成したり、各学校の取り組みに合わせた尺度を研究者と協力しながら作成したりすることができるよう体制が整っていくことが期待されます。

② 身に付いた能力を目に見える形で記録しよう

評価の二つ目のポイントは、キャリア教育を実践した結果、子どもたちにどのような力が付いたのかを、具体的な記録の形で残すということです。

キャリア教育を通じて子どもたちに身についた力を評価するためのチェックシート（例）

学年 _____ 年

評価者 _____

氏名 _____

能力	評価項目	チェック 十分できている…4 できている…3 もう少しである…2 十分ではない…1
人間関係・社会形成能力	他者の個性について理解している。	1 2 3 4
	他者に配慮しながら自分の考えを伝えている。	1 2 3 4
	礼儀正しく他者と接している。	1 2 3 4
自己理解・自己管理能力	自分自身の長所について理解している。	1 2 3 4
	自分から進んで考えて行動している。	1 2 3 4
	辛抱強く課題に取り組むために、自分の感情をコントロールしている。	1 2 3 4
課題対応能力	課題の解決に必要な情報を、適切に選択している。	1 2 3 4
	課題の解決に向けて、適切な計画を立てている。	1 2 3 4
	課題の解決に向けた計画および活動を、必要に応じて改善している。	1 2 3 4
キャリアプランニング能力	働くことの意義や役割について理解している。	1 2 3 4
	自分の生活と将来の生き方との関連性について理解している。	1 2 3 4
	将来の自分についての見通しを立てている。	1 2 3 4

*評価項目については、各学校の教育活動に即して検討するとよいでしょう。

中学校段階の子どもたちであれば急激に発達・変化していくでしょう。そうした変化を随時子どもたち自身が振り返ることができるよう、形として残しておくことも重要です。

こうした評価のための方法としては、「キャリア教育ポートフォリオ」の作成などが挙げられます。一つ一つのキャリア教育の実践を行った後、子どもたち一人一人にどのような能力が身に付いたのか記録することで、教育改善にも生かすことができる一方で、子どもたち自身の励みにもなり、また将来的には自己理解を深める一資料にもなり得ます。



さらに、そのポートフォリオを家庭で振り返ることによって、保護者の方々との共通理解や連携に生かすこともできるでしょう。またそのファイルを持って進学することで、学校間(異校種間)連携も図りやすくなるかもしれません。また、教師の側の評価に加え、子どもたち自身の自己評価を加えるなど様々な工夫をすることで、評価のための資料をキャリア教育の実践に使うこともできるでしょう。

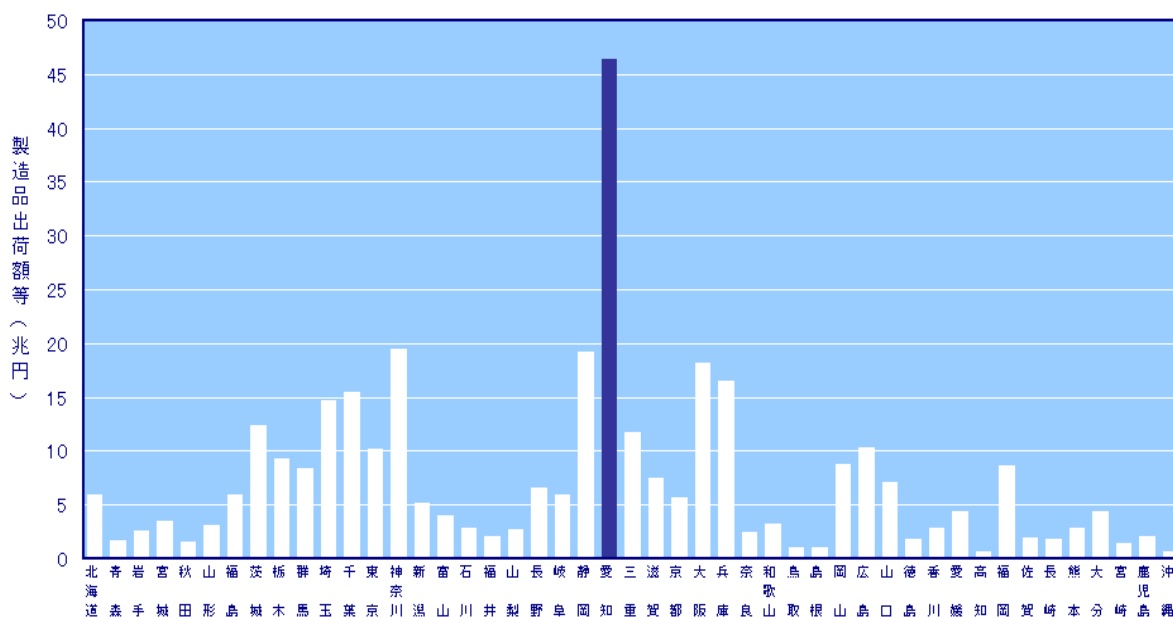
(5) 愛知らしさを生かそう

キャリア教育を行うに当たっては、これまでに述べてきたような基本的事項を踏まえた上で、更にそれぞれの地域の特色を踏まえた実践を考えていくことが必要です。将来海外で活躍するにしても、地元で活動するにしても、生きることや働くことを考えたとき、子どもたちが自分たちの暮らす地域がどのような地域なのかを知ることはとても意義深いからです。では、愛知らしさとは何なのでしょう。

愛知らしさを表すものは数多くありますが、キャリア教育との関連を考えたとき、「多様な産業が身近に存在する」こと、「地域に伝統文化が根付いている」こと、そして「キャリア教育の実績をもつ」ことの3つが挙げられます。では、これらの特色を、キャリア教育にどう生かしていけばよいのでしょうか。

① 身近に存在する多様な産業を生かそう

まず「多様な産業が身近に存在する」ことについて考えてみましょう。全国各地を見ても、農業を中心とする第一次産業、製造業を中心とした第二次産業、そして都市部のサービス業を中心とした第三次産業、それぞれが各地域に身近にある都道府県は余り多くありません。愛知は、製造品出荷額が33年連続全国1位を堅持するなど、全国でも有数の「ものづくり」の県であり産業立県だと言えます。第二次産業だけでなく、他の分野においても全国的に上位を占めているものがあり、それらを国内外に向けて発信している点では大変恵まれた地域です。地域によっては、多様な産業で働く大人の姿を見せようと思っても、限られた産業しか身近にないことから見せづらいというのが現実です。しかし愛知では、子どもたちに対し



平成20年 都道府県別製造品出荷額等(従業者4人以上の事業所)
出典：平成20年工業統計表(概要版)

て、様々な産業で働く大人の姿を見せる機会を数多くもたせることができるのです。

これは、単に工場見学の機会を増やすということだけではなく、それぞれの産業を支える大人がいて、初めて自分たちの生活が成り立っているという実感をもたせやすいということであり、またそうした働きかけを積極的に行うことが、愛知らしいキャリア教育の実践につながっていくでしょう。

② 根付いている伝統文化を生かそう

次に、「伝統文化が根付いている」という点についてもみてみましょう。キャリア教育でいう「キャリア」とは、過去から現在そして未来へとつながる人の生き方を指す言葉です。伝統文化は何代にも渡って受け継がれているものであり、そうした伝統文化を身近に感じることは、異年齢の方々との交流をもつことにもつながります。愛知は、



「芸どころ」と言われる名古屋を抱えるなど、伝統芸能を重んじる土地柄であり、県民は地域の信仰や祭事などを大切に守る気風をもっています。さらに特徴的な食文化や伝統工芸を数多く有する県だと言えます。本県はそうした伝統文化を自分たちが受け継ぎ、未来につなげていくのだということを意識しやすい環境なのです。

本県でキャリア教育をするに当たっては、直接的にそうした伝統文化の継ぎ手になることだけではなく、そうした伝統文化を未来へと残し続けていく人がいるからこそ自分たちが存在するのだと感じられるように、進めていくことが効果的でしょう。

③ これまでのキャリア教育の実績を生かそう

また、本県では平成17年度から平成20年度まで、地域の教育力を最大限に活用した「キャリア・スタート・ウィーク推進地域事業」を実施し、中学校を中心とした5日間以上の職場体験等を行ってきました。平成18年度からは「あいち・出会いと体験の道場」を実施し、中学生を対象に、5日間程度の職場体験活動を行っています。こうした具体的な取組の成果を各学校が生かすことで、愛知らしいキャリア教育の方向性を探ることができると思います。

平成23年3月には、「キャリア教育生き方メッセージ集（DVD）」が各小中学



校に配付されます。事業主の思いが詰まったこのDVDも大いに活用したいものです。

～ キャリア教育を進める皆さんへ ～

地域の子どもたちを、地域の大人たちで育てていくという姿勢は、植樹に例えられます。私たち大人の暮らす地域でどのような子どもたちを育てるのか、それは、最終的に自分たちの住む地域をどのような地域にしていきたいのかにつながります。なぜなら、その地域に愛情や愛着をもった子どもたちは、望ましいアイデンティティを形成し、夢を抱きながら地域を考えるようになり、地域を育てるようになるからです。

小さな木々が、森に包まれて自らの力で育っていくように、私たち大人は、子どもたちの社会的・職業的自立に向けて、夢を描きながら働きかけていく必要があります。この「キャリア教育推進の手引」が、将来を見すえた皆さんの植樹の一助となることを期待します。

